



大阪ブランド戦略

時代を超えて読みつがれる 大阪の文学

～ 巨匠・名作・名場面～

大阪ブランドコミッティ
文学パネル

目次

1 大阪文学の礎	1
(1) 万葉集にも詠まれた「みおつくし」	1
(2) 短歌・連歌の発展	1
(3) 西鶴の出現と浮世草子の流行	2
(4) 近松が確立した文学とショービジネスのコラボレーション	3
(5) 教養文化都市大阪の形成	3
2 燦然と輝く文学界の巨星たち	4
(1) 文壇への登竜門「直木賞」も大阪から 直木三十五	4
(2) 情熱の歌人も大阪から 与謝野晶子	4
(3) 大阪の作家と言えば・・・この人 織田作之助	5
(4) 日本初のノーベル文学賞は大阪から 川端康成	5
(5) 歴史小説の第一人者も大阪から 司馬遼太郎	6
3 直木賞・芥川賞作家を輩出する大阪	6
(1) 直木賞(直木三十五賞)	7
(2) 芥川賞	11
4 みんなが知っている大阪ゆかりの作家たち	16
5 文学の普及・所蔵、そして街づくりへ 文学の庫	19
6 大阪文学のPR戦略	22
参考「大阪文学年表」	23
文学パネル構成メンバー	28
【参考】大阪ブランド戦略について	29

1. 大阪文学の礎

(1) 万葉集にも詠まれた「みおつくし」

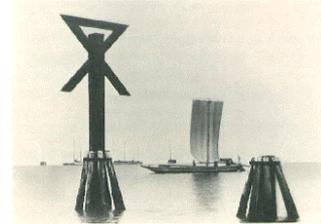
大阪の繁栄の歴史は、文学隆盛の歴史でもありました。

7～8世紀、大阪には、我が国最初の本格的な都となる難波京が造営され、世界に発信する国際港である難波津が設置され、政治と経済の中核地として栄えていました。

このころ、日本は遣隋使、遣唐使による中国との交流、あるいは朝鮮との直接交流などにより、思想と文化を高め、文学も急速な発展を遂げます。当時、日本の文字は、漢字による表記しかありませんでしたが、このころに編まれた『万葉集』は、万葉仮名という独自の表音文字で編纂されています。

『万葉集』には、大阪の地が「難波」「難波方(なにはがた)」、「難波乃小江(なにはのをえ)」などの語で詠まれるなど、大阪に関することが多数記述されています。なかでも、「滯標(みをつくし)」という語は、その後、平安時代の『古今和歌集』などにも詠まれ、大阪の景物を代表する語として、和歌における大阪の枕詞となります。

ちなみに、「滯標(みをつくし)」とは、通行する船に水脈や水深を知らせるための航路標識ですので、水運交通の発達とともに繁栄した水の都、大阪にはもっともふさわしい枕詞といえるでしょう。また、「滯標(みをつくし)」という語は「身を尽くす」という意味をかけて用いられることが多く、古代に限らずその後の叙事、抒情文学の中にしばしば用いられる「滯標」は大阪人の精神的イメージを形象したともいえるでしょう。



(2) 短歌・連歌の発展

中世の日本文学史では、抒情における和歌・連歌の発展を特記すべきでしょう。

当時、和歌は寺社に奉納することが大変流行していましたが、大阪の地では**住吉大社**がその中心となります。この時期に和歌より自立したといえる連歌は、その文芸性を高める一方、和歌より裾野を広げ、下級武士階級などにも受け入れられます。中世末期の織豊政権下では茶道とともに社交的な場としての人気を博し、大阪の各地でも催されます。今でも平野の**杭全神社**では連歌の会が催されています。

連歌は発句、脇句、三句というルールのもと、集団で詠み進む文芸ですので、個人的な所産である文学より開放的であったといえます。しかし、それも文芸性が高まるにつれて、連歌の家、連歌師というリーダーを必要とし、ルールも複雑化していったので、伝統的な連歌より俳諧という面白みを中心とする連歌の方が楽しめるようになりました。

この代表といえるのが、**大阪天満宮連歌所**の宗匠、**西山宗因**でした。西山宗因は俳諧師としては京都の松永貞徳に学びながら、その松永貞徳を中心とする貞門派から独立し、談林派を名乗ります。和歌・謡曲などの文句の奇抜なパロディ、句調の軽妙さなど、旧来にない面白い文芸は、たちまち大阪の人々に受け入れられ、大阪は全国的にもすぐれた俳諧文化圏となります。

俳人として名声を得た江戸の**芭蕉**は、大阪の地で客死しています。芭蕉の蕉風は江戸を中心として広まりますが、大阪でも弟子の松木淡々が島之内鰻谷に住居を構え、浪華俳諧の祖として、俳諧の隆盛に務めます。河内や泉州では後に江戸で川柳の名で広まることになる前句付が盛んに行われ、『咲くやこの花』『難波土産』が編まれています。



松尾芭蕉墓

大阪天満宮(大阪市北区天神橋2丁目1番8号)

通称「**てんまのてんじんさん**」には、「学問の神様」菅原道真(すがわらのみちざね)が祭られています。

「学問」特に**文学**にすぐれていた道真にあやかると、受験シーズンなど、学問のお守りがもっとも多く求められています。彼は文学に長け、祖父の清公(きよきみ)、父是善(これよし)、そして道真は、三代続いて学者の最高位である文章博士(もんじょうはかせ)に任命されました。

のちに京都から大宰権帥に左遷されることになり、自邸を去るときに詠んだ詩はよく知られています。(三代勅撰和歌集の一つ『拾遺集』所収)

「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな」

図書館ができるずっと前、大阪天満宮は連歌所として連歌の拠点となっていました。また、発行された印刷物は天満宮に奉納するというかたちでここにおさめられていました。いわば、現在の国会図書館のような役割を果たしていました。

【URL】 <http://www.tenjinsan.com/tenjinsan.html>



大阪天満宮提供

(3) 西鶴の出現と浮世草子の流行

大阪は中世後期、堺を中心とした海外貿易で栄え、さらに、近世(江戸時代)には、年貢米による米経済の市場は、**北浜**(後堂島)を中心として活況を呈し、**西回り航路**の開発によって、諸国の物産は大阪に集まり、「**天下の台所**」と呼ばれるようになります。

こうした繁栄を背景として、大阪には高度な文化が育っていきます。さきほどの談林俳諧を楽しむ人々は大阪三郷に限らず、河内平野の大和川の舟運に携わる人々や庄屋にまで広がります。その代表格が、柏原の三田浄久です。これらの人々は、教養を高めることを望み、読者として大阪の本屋、貸本屋を支えることとなります。この俳諧や浮世草子の隆盛には、心齋橋などを中心とした出版・書肆(しよし)の活躍があったことも見逃せません。江戸、京都、大阪の三都版として大阪から全国へと発信したのです。

このような文学環境が整った17世紀末に談林俳諧の宗匠から、浮世草子作家、すなわち現代小説家に転進した**西鶴**が出現します。出自は不明ながら、俳諧をたしなむ者なら誰一人として知らない者はいない西鶴が、『**好色一代男**』を大阪の地から刊行したのです。これは京都、江戸、日本全国で好評を博し、その後『**好色五人女**』などの好色物や『**武家義理物語**』の武家物、『**日本永代蔵**』『**世間胸算用**』などの町人物など、当時の人々の世態人情を描いた約20作品の佳作を大阪から発信し続けます。特に『**日本永代蔵**』巻1の3「浪風静かに神通丸」に描かれた米市場の盛況ぶりは、「天下の台所」として、経済の中心地であった当時の大阪の姿を見事に伝えています。



井原西鶴



井原西鶴墓

——惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間(2時間)に、五万貫目(約12億円)のたてり商(立ち会い取引)もある事なり。その米は、蔵々にやまをかさね、夕の嵐朝の雨、日和を見合せ、雲の立所をかながへ、夜のうちの思ひ入れにて、売人有、買人有。一分二分(約200~400円)をあらそひ、人の山をなし、……今もまだかせいで見るべき所は大坂北浜、流れありく銀(かね)もありといへり。——

この浮世草子の分野には西鶴の弟子北条団水、西沢一風、都の錦、多田南嶺などが続き、その後 80 年ほど隆盛が続きます。

ちなみに、後の 20 世紀初頭に一世を風靡した織田作之助が深く西鶴を愛しているように、直木三十五、上司小剣等、大阪を舞台とした大衆小説が真価を発揮するのも、大阪小説に西鶴浮世草子の影響があることは見逃せません。

(4) 近松が確立した文学とショービジネスのコラボレーション

17 世紀末から 18 世紀の初頭、劇作家であり、浄瑠璃作者として大成した近松門左衛門が登場します。近松が書いた大阪の地を舞台とした『曾根崎心中』『心中天の網島』などはあまりに有名ですが、近松門左衛門と同時期に活躍した紀海音の『お染久松袂の白しぼり』も大阪を舞台としています。まさに、大阪は戯曲の場でもありました。

江戸時代の早い時期より道頓堀を中心とした芸能は盛んでしたが、大阪の芸能は全国的に常に隆盛でした。織田作之助『夫婦善哉』にも、浄瑠璃を口ずさむという場面がしばしば登場することからも、大阪人と浄瑠璃の深い関わりがわかります。現在でも、浄瑠璃のことを「文楽」と呼びます

が、これが大阪の植村文楽軒の座名によることも感慨深いことです。



近松門左衛門墓



夫婦善哉

(5) 教養文化都市大阪の形成

18 世紀になると、文運東漸と言って、8 代将軍徳川吉宗が江戸に政治・経済だけではなく、文化の中心も移行させようとしています。大阪は文化都市としての首席を徐々に江戸に譲ることとなります。その危機感もあったのでしょうか、大阪人の手による私塾「懐徳堂」が開設されます。三宅石庵を学主に迎えて以来、素晴らしい町人教育の拠点となりますが、異端児富永仲基の儒仏神に対する思想は、近年注目されています。大阪にはこのような自由な学風の教育を許容し、支える精神があったからこそ、後に当代の知識人のサロンの主宰者のような蒐集家で博物学者木村兼葭堂や、並はずれた町人学者山片蟠桃を生みだし、さらに緒方洪庵による蘭学塾「適塾」につながり、結果的に福沢諭吉、大村益次郎等近代日本の礎に関わる人々を輩出できたのでしょう。



上田秋成

また、尾崎雅嘉は儒学、国学を教授した学者ですが、『百人一首一話』を刊行し、大好評を得ます。『百人一首』を身近にしたのは大阪であったのです。

大阪生まれ大阪育ちの読本作者上田秋成は、やがて『雨月物語』『春雨物語』を書き、読本作家となる上田秋成(和訳太郎)が『諸道聴耳世間狙』や『世間妾形気』を出版した怪奇小説作家として知られますが、その日本語学に関する見識は、当時の国学の大人本居宣長と拮抗するものでした。

他にも、18、19 世紀と細かく見れば、戯作史、芸能史、俳諧史、和歌史、狂歌史、漢詩文等にすぐれた足跡を残します。毛馬堤を舞台とした俳詩『春風馬堤曲』を書いた蕪村、その弟子池田の呉春等、枚挙にいとまがありません。江戸時代の大阪は、このような文人たちが闊歩し、風流な交わりを持ち、いろいろな文学や学問を育てていった文化都市であったのです。

2. 燦然と輝く文学界の巨星たち

(1) 文壇への登竜門「直木賞」も大阪から▼直木三十五

直木賞は、芥川賞と並び日本文壇における二大文学賞といえます。大阪南区出身の作家、直木三十五の功績を称え、1935年より(1934年没)、「文藝春秋社」菊池寛が制定しました。直木の名を冠して、正式には直木三十五賞といいます。同時に制定されたのが、芥川賞です。(正式:芥川龍之介賞)

各新聞・雑誌(同人雑誌を含む)あるいは単行本として発表された短編および長編の大衆文芸作品中最も優秀なるものに呈する賞です。無名・新進・中堅作家が対象となります。



植村鞆音氏提供

直木三十五(1891～1934)

大阪市南区生まれ。早稲田大学英文科中退。

本名は植村宗一。直木三十五のペンネームの始まりは1922年「時事新報」に月評を書くにあたり、苗字の植村の「植」の文字を「木 直」に分解し、「直木」としました。その時の年齢が三十一歳であったことからそのまま名前を直木三十一とし、それからは自分が年をとるごとに毎年三十二、三十三と変えてゆき、三十五歳で定着しました。旧制市岡中学卒業後、奈良で小学校代用教員をしていましたが、早稲田進学のため上京。1918年、春秋社(トルストイ刊行会)に参加、『トルストイ全集』を刊行。関東大震災を機に帰阪し、プラトン社入社。月刊誌「苦楽」の編集に携わりました。『楠木正成』『足利尊氏』ほか、薩摩藩のお家騒動を描いた代表作『南国太平記』は「大阪毎日新聞」に連載され、彼を文壇の寵児として不動の地位に押し上げました。『大阪物語』『大阪落城』など大阪の歴史を書いた作品多数。

★「直木三十五記念館」 大阪府中央区谷町6丁目5-26”複合文化施設～萌(ho)～2階

【URL】 <http://www.eonet.ne.jp/~karahoriclub/naoki/index.html>

(2) 情熱の歌人も大阪から▼与謝野晶子



堺市提供

与謝野晶子(1878～1942)は、堺市の甲斐町に、和菓子で有名な駿河屋の三女として誕生し、明治・大正・昭和を短歌とともに生きました。

「情熱の歌人」と呼ばれた彼女は、近代文学史上屈指の女性であるとともに、与謝野鉄幹(寛)の妻であり、11人の子どもの母でもありました。

1901年に出版された『みだれ髪』は、夫へのあふれる愛と青春のみずみずしさを歌い上げ、若い世代の圧倒的な支持を得て浪漫主義の代表作となりました。

また、生涯を通して『源氏物語』をはじめとする古典文学に傾倒し、その現代語訳に情熱を注ぐ一方、女性の権利に焦



点をあてた評論も多く著し、女性教育の分野でも積極的な役割を果たしました。幅広い分野に次々と挑戦し、女性の自由と自立を求めて力強く生涯を送った彼女の魅力は尽きることがありません。

★「与謝野晶子文芸館」 大阪府堺市堺区田出井町1番2-200号ベルマージュ堺式番館2～4F

【URL】 <http://www.sakai-bunshin.com/bunka/b02.html>

与謝野晶子『みだれ髪』

(3)大阪の作家と言えば…オダサク▼織田作之助

織田作之助(1913~1947)は、大阪市南区(現・中央区)生まれです。旧制大阪府立高津中学校(現・大阪府立高津高等学校)卒。第三高等学校中退。三高時代から文学に傾倒し、1937年に青山光二らと同人誌『海風』を創刊。自伝的小説「雨」を発表し注目を浴びました。1939年「俗臭」が芥川賞候補に、翌年には代表作『夫婦善哉』を発表しました。太宰治、坂口安吾、石川淳とともに新戯作派、無頼派などと呼ばれ、「オダサク」の愛称で親しまれました。井原西鶴に傾倒し、西鶴作品の現代語訳も行っています。大阪の中央区千日前自由軒のメニュー「元祖・混ぜカレー」をよく好んで食べていたとか。



織田禎子氏提供

没後、大阪文学振興会によって「織田作之助賞」(年1回公募。2003年で20回目)が主催されています。

『夫婦善哉』は姉夫婦がモデルになっています。梅田新道の間屋の勤当された若旦那とそれを支えて尽くす妻が主人公。作品には「たこ梅」など実在の店の名が出てきます。法善寺横町の水掛不動尊の横の店では二人が食べた「夫婦善哉」(ぜんざい)を味わうため、行列ができています。



織田禎子氏提供

(4)日本初のノーベル文学賞は大阪から▼川端康成



川端香男理氏提供

1968年日本で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成(1899~1972)は大阪市北区生まれです。

大阪天満宮南門にほど近い実家にて生誕。父は開業医でしたが、わずか2歳で父を、翌年母を亡くします。そのあと祖母・姉・祖父を亡くし、1914年に孤児となりました。茨木中学を卒業後、旧制第一高等学校から、東京帝国大学文学部英文科に進みます。参加した第6次「新思潮」の発刊には親友でのちに大阪府八尾市で住職を務めた今東光が加わっています。そこで菊池寛らに見出され、文壇デビューを果たしました。1923年菊池の創刊した「文藝春秋」には当初から参加しています。代表作は『16歳の日記』『伊豆の踊り子』『雪国』『古都』など。彼の作品は、何度も舞台化・映画化され、人気を博します。

写真は、ノーベル賞受賞の翌年(1969年)大阪に来た時のものです。70歳でした。母校・茨木高校での文学碑除幕式に出席の後、市役所

にて茨木市名誉市民章受賞および記念講演が行われたときのものです。没後、茨木名誉市民第一号に称えられ、同時に市立川端康成文学館が設立されました。

★「川端康成文学館」大阪府茨木市上中条2-11-25

【URL】 <http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kawabata/index.htm>

(5) 歴史小説の第一人者も大阪から▼司馬遼太郎



大阪市浪速区生まれ。大阪外語学校(現・大阪外国語大学)蒙古語卒業。新日本新聞社を経て産経新聞勤務。在職時の1960年「梟の城」で第42回直木賞を受賞しました。

『竜馬がゆく』、『坂の上の雲』は1,000万部を越すベストセラーとなり、『翔ぶが如く』、『項羽と劉邦』、『国盗り物語』などの作品も多くのファンの心をつかみ、今も読まれ続けています。

大河ドラマなど何度もTV映像化され、広い年齢層に愛されています。1966年『竜馬がゆく』『国盗り物語』で菊池寛賞受賞。1972年、『世に棲む日々』で吉川英治文学賞受賞。1976年、日本芸術院恩賜賞受賞。1981年、日本芸術院会員。1982年、『ひとびとの跼音』で読売文学賞受賞。1983年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。

1984年、『街道をゆく 南蛮のみち I』で日本文学大賞受賞。

1987年、『ロシアについて』で読売文学賞受賞。1988年、『韃靼疾風録』で大佛次郎賞受賞。1991年、文化功労賞。1993年、文化勲章受章。中でも「街道をゆく」(週刊朝日)、「この国のかたち」(文藝春秋)は人気連載でした。『大坂侍』『上方武士道』『大阪物語』など、大阪が題材になっています。『花神』の主人公長州の大村益次郎が学んだ「適塾」も大阪、暗殺に遭難し落命するのは浪華仮病院というように、司馬文学には大阪が随所に顔を出しています。2001年、東大阪市の自宅と隣地に司馬遼太郎記念館が開設されました。

★「司馬遼太郎記念館」大阪府東大阪市内下阪3丁目11番18号

【URL】 <http://www.shibazaidan.or.jp/>

3. 直木賞・芥川賞作家を輩出する大阪

(1) 直木賞(直木三十五賞)

現在でも、直木・芥川両賞は文壇・出版界に強い影響力を持っています。日本における二大文学賞と言えます。その直木が大阪の出身であることはかけがえのない文学的財産であるといえます。

これまでの直木賞受賞者は、158名(2006年2月末現在)で、内、大阪出身の作家は13名。

東京都に次ぎ全国第2位を誇っています。

芸者好き、浪費家、稀代の借金王、稀代のプランメイカー



植村鞆音氏提供

直木三十五(1891~1934)

直木賞は、作家直木三十五を記念して、死の翌昭和10年、菊池寛により設けられました。芥川龍之介を記念した芥川賞と同時に制定され、二大文学賞として今日に至っています。

直木三十五という人は、一風変わった作家でした。小心にして傲岸、寡黙にして雄弁、女好き、浪費家、稀代の借金王、稀代のプランメイカー。長谷川伸は、「もし昭和畸人伝を編む人があれば、まず最初にあげなければならない稀有の人物」といっています。代表作『南国太平記』をはじめ七百編におよぶ著作を書き残し、大正末期から昭和初期を足早に駆け抜けた伝説の作家です。

明治24年、大阪市南区内安堂寺町通生まれ。

生家は古着屋です。大阪の桃園尋常小学校、育英高等小学校、市岡中学校を卒業後、明治44年上京して早稲田大学に入学します。以後、同棲、大学中退、出版事業、雑誌編集、映画製作と、疾風怒涛の人生を送った彼はやがて筆一本の生活に入り、昭和初期『去来三代記』『由比根元大殺記』『南国太平記』を執筆して人気作家の頂点に立ちます。しかし、それも長くは続きません。『相馬大作』『弘法大師』を讀売新聞、朝日新聞という二大紙に連載しつつ、昭和9年脊椎カリエス、結核性脳膜炎のため壮絶な死を遂げます。43歳でした。新聞は、それを、「あっぱれ武士の斬り死」と称えました。

本質はプランメイカーとっていいでしょう。最初のヒットとなった「トルストイ全集」(春秋社)の企画・出版、「植村」という姓の「植」をタテに二分割し年齢を加えたペンネームの創出、文壇を震撼とさせた辛辣なゴシップ記事、昭和初期の編集デザイン史を華麗に彩った雑誌「苦楽」の編集、「聯合映画芸術家協会」を舞台にした映画製作、等々。もともと、彼がやりたかったのは、出版、美術商、芸術家のサロン、材木商、鉱山採掘などです。彼が誇ったのは、文学の質ではなく、執筆の量とスピードでした。「おれの書くものなど、フォード、芋、鯛の類」と直木は書いています。阿らず、さりとして卑下することもなく、それがまことに心地よい。ある意味で大阪的だと思いませんか。

(植村鞆音筆 直木三十五記念館名誉館長/直木三十五甥)

※ 画像は、ともに新しもの好きの直木らしい写真。

上:当時日本に数台しかない車を文藝春秋の菊池寛らと共有していました。

下:昭和7年当時、直木は東京大阪間を飛行機で移動するのが好きでした。

搭乗レコードを保持していた直木。これから空路で上海へ取材に出発します。

大好きな飛行機の前でポーズ。パッチリ洋装で決めています。



植村鞆音氏提供

大阪出身の直木賞受賞者(敬称略)

受賞回	授賞年	氏名	受賞作
11	1940年上半期	河内仙介	軍事郵便
19	1944年上半期	岡田誠三	ニューギニア山岳戦
39	1958年上半期	山崎豊子	花のれん
42	1959年下半期	司馬遼太郎	梟の城
44	1960年下半期	黒岩重吾	背徳のメス
54	1965年下半期	新橋遊吉	八百長
61	1969年上半期	佐藤愛子	戦いすんで日が暮れて
71	1974年上半期	藤本義一	鬼の詩
80	1978年下半期	有明夏夫	大浪花諸人往来
109	1993年上半期	高村薫	マークスの山
114	1995年下半期	藤原伊織	テロリストのパラソル
133	2005年上半期	朱川湊人	花まんま
134	2005年下半期	東野圭吾	容疑者Xの献身

監修:(財)日本文学振興会 株式会社文藝春秋文藝振興事業部

河内仙助

〔第11回 1940年上半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1898～1954)大阪市生まれ。大阪市立甲種商卒業。1938年上京「新鷹会」に所属しました。1940年3月「大衆文藝」に『軍事郵便』を発表し、直木賞を受賞することとなります。大阪出身者として、第一号の直木賞受賞者となりました。彼の受賞以後、65年間に12名がそのあとに続きます。この時の、選考委員には、菊池 寛・川端 康成・宇野 浩二・谷崎 潤一郎・吉川 英治・佐藤 春夫・大佛次郎・久米 正雄・室生 犀星・山本 有三・横光 利一らが名を連ねています。ほか、『遺書』『わが姉の記』などの著書があります

岡田誠三

〔第19回 1944年上半期 受賞〕



朝日新聞提供

(1913～1994)大阪市生まれ。大阪外国語学校(現大阪外国語大学)英語科卒業。朝日新聞社入社。南史仏印、ニューギニア従軍特派員記者時代の経験を書いた小説『ニューギニア山岳戦』で1944年上半期に第19回直木賞を受賞しました。1968年定年退職後、執筆に専念し『定年後』がベストセラー、NHKテレビ放映、大塩平八郎の乱を題材にした『雪華の乱—小説・大塩平八郎』、『電話の声』、『自分人間』など、大阪が舞台に用いられています。また『大阪町人雑学の精神』、『中之島倒影八景』などで大阪を鋭く見つめています。遺作は『小説・法隆寺再建』。父親は町人学者・岡田播陽。

山崎豊子

〔第39回 1958年上半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1924～) 大阪市生まれ。大阪船場の商家に生まれました。京都女子専門学校(現京都女子大学)国文学科卒業。毎日新聞大阪本社調査部に就職。移動先で芸副部長・井上靖と出会いました。彼のもとで記者としての訓練を受けることになります。勤務のかたわら小説を書きはじめ、1957年『暖簾』を刊行。翌年『花のれん』により第39回直木賞受賞。『白い巨塔』は大阪の大学病院を舞台とし、再三映画ドラマ化され、人気を博してきました。『不毛地帯』『二つの祖国』『大地の子』の戦争3部作の後、『沈まぬ太陽』を発表。1991年、菊池寛賞を受賞しています。

司馬遼太郎

〔第42回 1959年下半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1923～1996) 大阪市生まれ。大阪外語学校(現・大阪外国語大学)蒙古語科卒業。1960年「梟の城」で第42回直木賞を受賞

※ 6ページ 参照

黒岩重吾

〔第44回 1960年下半期 受賞〕



黒岩秀子氏提供

(1924～2003)。大阪市生まれ。同志社大学法経学部法科卒業。終戦後、証券会社に入社し投資の成功、病気、株の暴落を経て自宅を失い、西成区釜ヶ崎のドヤ街に潜んで小説を書きます。1961年『背徳のメス』で第44回直木賞を受賞しました。1980年『天の川の太陽』で第14回吉川英治文学賞受賞。1991年紫綬褒章受賞。1992年菊池寛受賞。ほか 日本の古代史をテーマにした歴史小説や社会派推理小説を多く残しています。西成界隈を描いた『西成海道ホテル、中之島回生病院』を描いた『我が炎死なず』があります。

新橋遊吉

〔第54回 1965年下半期 受賞〕



新橋遊吉氏提供

(1933～)大阪市生まれ。初芝高校卒業。7年もの療養生送ったのち、いくつもの仕事を経て製作所の旋盤工として働きます。

1965年に加わった「讃岐文学」に発表した『八百長』にて、1966年第54回直木賞受賞。折からの競馬ブームで多くの読者をつかみ、売れっ子となります。スポーツ紙などに、競馬を中心としたギャンブル小説を書きます。代表作は、多くのギャンブラー層をつかんだ『男が賭ける』『競馬放浪記』『馬券師稼業』『冥土の馬券師』『大穴一直線』などのギャンブル小説、時代小説『蒼き潮流の狼たち』などがあります。

佐藤愛子

〔第61回 1969年上半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1923～) 大阪市生まれ。甲南高女卒業。父は小説家の佐藤紅緑。異母兄に詩人のサトウ・ハチローがいます。自伝的小説『愛子』等で文壇へデビューしました。

1969年自らの経験を書いた『戦いすんで日が暮れて』で、直木賞受賞。男性に厳しく喝を入れる辛口エッセイで売れっ子になります。頼りない男性の姿と対照的に描かれるたくましい妻の姿は「猛妻もの」と呼ばれました。父母をモデルにした『花はくれない』小説佐藤紅緑『女優万里子』のほか、2000年父佐藤紅緑、兄サトウ・ハチローらをモデルとした血族の長編小説『血脈』を完結、菊池寛賞を受賞しました。

藤本義一

〔第71回 1974年上半期 受賞〕

藤本義一氏提供

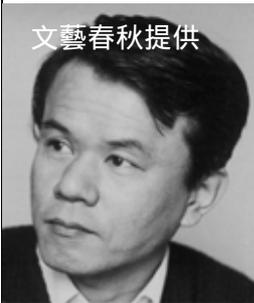


(1933～) 堺市生まれ。大阪府立大学経済学部卒業。放送作家・脚本家・小説家・テレビ司会者など活動の幅は広い。堺市で終戦を迎えました。大阪大空襲に遭い、倒れた両親の代わりに家計を支えるため府下の闇市で働いた体験を持ちます。大学在学中に、ラジオドラマを書き藝術祭文部大臣賞を受賞。1974年上方落語家桂馬喬の人生を描いた『鬼の詩』で直木賞受賞しました。阪神淡路大震災後は、被災した遺児へのボランティア活動を続けています。大阪が舞台になった作品は、『ちりめんじゃこ』『一尺五寸の魂』『鬼の詩』『花月亭団好色噺』などがあります。

有明夏夫

〔第80回 1978年下半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1936～2002) 大阪市生まれ。同志社大工学部二部中退。1979年『大浪花諸人往来(だいなにわしよにんおうらい)耳なし源蔵召捕記事』で第80回直木賞受賞。この長編「捕り物帳」は、明治の初めの大阪が描かれたもの。これをはじめとする「耳なし源蔵」シリーズは、彼の代表作となり、NHK大阪放送局でドラマ化されました。1982年～83年『別冊文藝春秋』連載『骨よ笑え』は、かつて火葬場・刑場であった千日前を舞台としたもので、落語の興行主として成り上がっていったひとりの男の波乱の人生の物語を描き、現在のお笑いのメッカであるミナミの歴史を物語る作品です。

高村薫

〔第109回 1993年上半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1953～)大阪生まれ。国際基督教大学フランス文学専攻卒。外資系商社勤務を経て、90年にデビュー。処女作『黄金を抱いて翔べ』は、中之島や土佐堀界隈が舞台になっています。『マークスの山』(93年第109回直木賞)、『照柿』(93年)、『レディ・ジョーカー』(97年第52回毎日出版文化賞)の主人公は大阪出身です。ほかに、大阪を舞台にした初期の作品に『神の火』『李歐』。近年は近代日本の家族、政治、宗教などをテーマにした『晴子情歌』(02年)、『新リア王』(05年)を上梓しています。

藤原伊織

〔第114回 1995年下半期 受賞〕

藤原伊織氏提供



(1948～)大阪市生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。広告代理店に2002年まで勤務し、小説を書きました。そのハードボイルド作品はそのサラリーマン体験が生かされています。1977年「踊りつかれて」で第4回野性時代新人文賞(佳作)、1985年に発表した『ダックスフントのワープ』で第9回すばる文学賞を受賞します。1996年に直木賞を受賞した『テロリストのパラソル』は、江戸川乱歩賞との史上初ダブル受賞となりました。ほか『蚊トンボ白鬚の冒険』、『てのひらの闇』、『雪が降る』、『ひまわりの祝祭』など。『シリウスの道』は広告代理店の内幕と大阪育ちの男女3人の秘密に迫るミステリーです。

朱川湊人

〔第133回 2005年上半期 受賞〕

文藝春秋提供



(1963～)大阪市生まれ。慶応義塾大学文学部国文科卒業。出版社勤務のち専業。2005年『花まんま』で直木賞受賞。受賞作の短編集には大阪の下町が舞台になったものが6編あります。両親の離婚で大阪をはなれ、「かえって大阪に憧れてきらきら輝くイメージが僕の中に醸成され」「心の中のノスタルジックな大阪」と言います。大阪での短い生活が彼の人生および作品に深く影響を与えています。幼少時代、大阪ローカル限定で流れていたお菓子(モスクワの味・洋菓子の「パルナス」)のCMソング、「てなもんや三度笠」など、時代特有のディテールが作品に生かされています。

東野圭吾

〔第134回 2005年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1958～)大阪市生まれ。大阪府立大学工学部電気工学科卒業。エンジニアとして勤務しながら、1985年『放課後』で第31回江戸川乱歩賞受賞。1999年『秘密』で第52回日本推理作家協会賞受賞。2006年『容疑者Xの献身』で第134回直木賞受賞。著書に『同級生』『変身』『分身』『天空の蜂』『悪意』『探偵ガリレオ』『手紙』『さまよう刃』等があり、幅広い作風で活躍しつつ、意欲的な挑戦を続けている。代表作の一つである『白夜行』の冒頭は、著者が生まれ育った、当時の大阪が舞台となっていて、実際の体験もいくつかエピソードとして生かされている。

(2) 芥川賞

芥川龍之介の名を記念して、直木賞と同時に1935年同じく「文藝春秋社」菊池寛によって制定されました。各新聞・雑誌(同人雑誌を含む)に発表された純文学短編作品中最も優秀なるものに呈する賞です。主に無名もしくは新進作家が対象となります。

これまでの直木賞受賞者は、138名(2006年2月末現在)で、内、大阪出身の作家は、13名。東京都に次ぎ全国第2位の地位を誇っています。



文藝春秋提供

芥川龍之介(1892～1927)

東京生まれ 東京帝国大学文科大学英文学科卒

芥川は1919年大阪毎日新聞に入社して、一時期毎日専属の作家として執筆していました。大阪が舞台になっているものに『枯野抄』『秋』『仙人』『同祖問答』(「大阪朝日新聞」)などがあります。代表作は、『鼻』『羅生門』『地獄変』『蜘蛛の糸』など。

文壇の寵児として一世を風靡しますが、1927年没。同年、彼は大阪を訪れ中之島公会堂で講演をしています。

大阪出身の芥川賞受賞者(敬称略)

受賞回	授賞年	氏名	受賞作
12	1940年下半期	櫻田常久	平賀源内
21	1949年上半期	由起しげ子	本の話
28	1952年下半期	五味康祐	喪神
32	1954年下半期	庄野潤三	プールサイド小景
38	1957年下半期	開高健	裸の王様
49	1963年上半期	河野多恵子	蟹
50	1963年下半期	田辺聖子	感傷旅行センチメンタルジャーニー
72	1974年下半期	阪田寛夫	土の器
77	1977年上半期	三田誠広	僕って何
79	1978年上半期	高橋三千綱	九月の空
94	1985年下半期	米谷ふみ子	過越しの祭
122	1999年下半期	玄月	蔭の棲みか
123	2000年上半期	町田康	きれぎれ

監修:(財)日本文学振興会 株式会社文藝春秋文藝振興事業部

櫻田常久

〔第12回 1940年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1897～1980)大阪市生まれ。東京大学独文科卒業。父は大阪控訴院判事。旧制高校、第四高等学校から東大卒業後、日本大学・明治大学で教鞭をとりながら、ドイツ戯曲の翻訳もしました。33歳のとき鎌倉から東京町田に移住し、半農生活を開始しました。1941年『平賀源内』で芥川賞受賞。戦争中は、『従軍タイピスト』、『最後の教室』、『艦上日記』などの時局小説を発表します。『安南黎明記』は、ホー・チミン(ニュー・ダイク)を題材にした小説です。戦後は農民運動に力を注ぎ、町議会議員・農地委員会委員長・農協組合長を歴任します。日本民主主義文学同盟結成に参加し、町田支部の機関誌「文芸多摩」を創刊をしました。戦後の著書は、『探求者』『安藤昌益』『画狂人北斎』『山上憶良』『首なし被葬者の謎』などがあります。

由起しげ子

〔第21回 1949年上半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1900～1969)大阪府泉北郡生まれ。神戸女学院音楽部中退。府立堺高等女学校卒業し音楽を志すも、断念。プール女学校英語科別科を卒業したのち、山田耕筰、ロランジに作曲・ピアノの個人レッスンを受けますが、腰椎カリエスのため中断。画家の伊原宇三郎と結婚後、パリに移住、現地にてピアノを習いますが、帰国後中断。別居後、翻訳・創作を始めることとなります。「アラビアン・ナイト」などを翻訳しました。代表作は、『本の話』『女中っ子』など。大阪が舞台になっているものに『警視総監の笑い』『秘めごと』などがあります。

五味康祐

〔第28回 1952年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1921～1980)大阪市生まれ。八尾中学卒業、第二早稲田高等学院を中退し明治大学文芸科に進みました。1944年に応召され46年復員後、保田与重郎に師事します。「柳生武芸帖」などの、「剣豪モノ」といわれる剣豪小説のブームを起こします1953年、『喪神』で芥川賞を受賞しました。大阪が舞台になっているのは、『猿飛佐助の死』『薄桜記』『天皇陛下ばんざい』など。『興行師一代』は、紀伊藩の氏族であり大阪で劇場を運営していた彼の祖父をモデルにしています。『大理石のひざ』は、大阪の興行師であった生家が描かれています。

庄野潤三

〔第32回 1954年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1921～)大阪市生まれ。九州帝国大学法文学部文科卒業。父は教育者で1917年創立の帝塚山学院の創立者でした。兄は児童文学者の庄野英二氏。1944年召集、終戦後復員し大阪府立今宮中学校で歴史を教えます。教職を経て、朝日放送入社。島尾敏雄、三島由紀夫、安岡章太郎、吉行淳之介、阿川宏之らと交流しました。55年『プールサイド小景』で芥川賞受賞を機に作家業に専念します。プールは大阪市住吉区の帝塚山学院のプールがモデル。この作品によって、吉行淳之介や安岡章太郎と並ぶ、「第三の新人」を代表する作家としての地位を確立しました。『水の都』では大阪商人のくらしが聞き書きによって記され、中之島、道頓堀、北浜などが出てきます。

開高健

〔第38回 1957年下半期 受賞〕



開高健記念会提供

(1930～1989) 大阪市生まれ。大阪市立大学文学部法学科卒業。大阪の寿屋(現:サントリー)に入社。宣伝部でコピーライターとして腕を振ります。勤務の傍ら『パニック』を発表し、新人作家として注目を集めました。1958年『裸の王様』で第38回芥川賞を受賞。退職し嘱託となります。1964年朝日新聞臨時特派員としてベトナム戦争に参加し、『ベトナム戦記』を、文藝春秋特派員としてパリ、ドイツ、サイゴンを回り『輝ける闇』を発表し毎日出版文化賞を受賞しました。趣味人で釣り名人、美食家としても知られます。2003年、邸宅を開放した開高健記念館が神奈川県茅ヶ崎市にオープンしました。

河野多恵子

〔第49回 1963年上半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1926～) 大阪市生まれ。大阪府女専(大阪女子大学)経済学科卒業。生家は西道頓堀で椎茸問屋を営んでいました。丹羽文雄主宰の雑誌『文学者』から文壇に出た一人。『蟹』で第49回芥川賞を受賞しました。のちに、芥川賞はじめ多数の賞の選考委員をつとめます。『幼児狩り』(新潮社同人雑誌賞)、『不意の声』(読売文学賞)、『一年の牧歌』(谷崎潤一郎賞)、『みいら採り猟奇譚』(野間文芸賞)、『後日の話』(毎日芸術賞、伊藤整賞)ほか、受賞多数。『谷崎文学と肯定の欲望』(読売文学賞)などの谷崎潤一郎の評論でも知られます。文化功労者、日本芸術院会員。勲三等瑞宝章受章。『女形遣い』長編『秘事』は、大阪とのつながりの深い小説です。

田辺聖子

〔第50回 1963年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1928～)大阪市生まれ。樟蔭女子専門学校国文科卒業。実家は大阪市内で写真館を営んでいました。その大きな洋館も戦争の空襲で焼けてしまいます。船場の金物問屋に勤め、そこでの商人たちの姿が関心を誘いました。1964年『感傷旅行センチメンタルジャーニー』で芥川賞受賞。恋愛小説は大阪弁で描かれ独特の世界感を創り出しています。『新源氏物語』等の現代語訳など読み易い古典ものは主婦層の女性にも広く親しまれています。1995年紫綬褒章受章。2000年文化功労賞。女流文学賞受賞、吉川英治文学賞受賞、菊池寛賞受賞。日本文芸大賞、読売文学賞、泉鏡花文学賞、井原西鶴賞など受賞多数。『大阪弁ちゃらんぽらん』『大阪弁おもしろ草子』『千すじの黒髪—我が愛の与謝野晶子』など大阪が材に取られています。

阪田寛夫

〔第72回 1974年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1925～2005) 大阪市生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。在学中、三浦朱門氏らとともに第15次「新思潮」を創刊しました。卒業後、朝日放送大阪本社に就職。上司であった庄野潤三のもとでラジオの教養番組制作に携わります。昭和34年いとこの作曲家大中恩氏の作曲で「サッチャんはね サチコっていうんだほんとはね」で知られる童謡「サッチャん」の作詞をしました。1975年『土の器』で芥川賞受賞。久保田万太郎賞、日本童謡賞、赤い靴児童文化大賞、野間児童文芸賞、毎日出版文化賞、川端康成文学賞、他、受賞多数。第45回日本芸術院賞恩賜賞(1989年)、勲三等瑞宝章(1995年)を受章。

三田誠広

〔第77回 1977年上半期 受賞〕



三田誠広氏提供

(1948～)大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部演劇専修卒業。父は、コピーのMitaの三田工業の創始者。1977年、『僕って何』第77回芥川賞を受賞しました。『いちご同盟』は映画化、NHKのドラマ化されました。日本文藝家協会の知的所有権委員長やNPO日本文藝著作権センター事務局長、文化審議会著作権分科会委員、文化審議会著作権分科会契約・流通小委員会委員ほか多数役職を務めています。早稲田大学客員教授。小惑星11921番は、国際天文学連合命名委員会によって Mitamasahiro と命名されています。女優の三田和代は実姉。

【URL】 <http://www.asahi-net.or.jp/~DP9M-MT/>

高橋三千綱

〔第79回 1978年上半期 受賞〕



高橋三千綱氏提供

(1948～)豊中市生まれ。早稲田大学文学部英文科中退。祖父は老舗の米問屋を営んでいましたが、父親が文学を志し老舗の米問屋を廃業し、一家で東京に移住しました。高校卒業後、サンフランシスコ州立大学英語学科創作コースへ入学。帰国後は、アメリカでの滞在記『シスコで語ろう』を自費出版します。早稲田大学を辞めた後東京スポーツ新聞社入社。第17回群像新人文学賞を機に文筆活動に入ります。1978年『九月の空』で第79回芥川賞受賞。1983年『真夜中のボクサー』映画を製作。『親父の年頃』には豊中市の生家を訪ねるくだりがあり、NHK第一でドラマ化されました。

【URL】 <http://homepage3.nifty.com/michitsuna/>

米谷ふみ子

〔第94回 1985年下半期 受賞〕



米谷ふみ子氏提供

(1930～)大阪市生まれ。大阪女子大学卒業。天王寺区立五條国民学校卒業、夕陽丘高等女学校から、大阪府立女子専門学校国文科入学。1985年、家事・育児の体験を元にした小説『遠来の客』で文学界新人賞、同年『過越しの祭』で新潮新人賞、1986年同作品で芥川賞受賞。他に小説「〇線に向かって」、エッセイ集「けったいなアメリカ人」、「なんや、これ？ アメリカと日本」「サンデー・ドライブ」など著書多数。二科会に3年連続入選し、関西女流美術賞を受賞。『マダム・キャタピラーのわめき』『ファミリー・ビジネス』など辛らつな文明批評が大阪弁で描かれ、大阪人の資質が愉快地に表現されています。

玄月

〔第122回 1999年下半期 受賞〕



玄月氏提供

(1965～)大阪市生まれ。大阪市立南高等学校卒業。いくつもの職業を経て、自営業を営みながら大阪文学学校にて文学を学び、同人誌「白鴉」を発行し執筆活動を始めます。1998年『舞台役者の孤独』が「文學界」でデビューを果たし、2000年に『蔭の棲みか』(「文學界」)で第122回芥川賞を受賞しました。代表作は、『悪い噂』『おしゃべりな犬』『寂夜』『異物』『山田太郎と申します』などがあります。エッセイ『ほんまに・・・どないなとんねん』は大阪の庶民的な感覚で描かれていて、「そんなあほな」「なんでやねん」という「ぼやき」と「ツッコミ」が大阪の漫才を連想させます。

町田康

〔第123回 2000年上半期 受賞〕



町田康氏提供

(1962～)堺市生まれ。大阪府立今宮高等学校卒業。高校時代よりバンド活動続ける。2000年『きれぎれ』で芥川賞を頂きました。当初から、独特のスタイルで独自の文章世界を展開します。『土間の四十八滝』で萩原朔太郎賞、『権現の踊り子』で川端康成賞、『告白』で谷崎潤一郎賞を受賞しています。ほか、『くっすん大黒』、『夫婦茶碗』、『屈辱ポンチ』、『実録・外道の条件』『爆発道祖神』、『パンク侍、斬られて候』、『浄土』など著作多数。『俺、南進して』は大阪がモデルになって、大阪の地名が少し変えながら出てきます。詩集には、『壊色』『供花』『町田康全歌詩集』『町田康詩集』などがあります。

【URL】 <http://www.machidakou.com/>

4. みんなが知っている大阪ゆかりの作家たち

先述した織田作之助『夫婦善哉』、直木三十五『大阪物語』、上司小剣『鱧の皮』のほかにも、有明夏夫『大浪花諸人往来』、宇野浩二『橋の上』、庄野潤三『水の都』、武田麟太郎『釜ヶ崎』、長谷川幸延『浪花隊顛末』、富士正晴『桂春丹治』、藤澤桓夫『私の大阪青春地図』『新雪』などの名作が大阪を舞台としていますが、全国的にはあまり知られていないのが残念です。

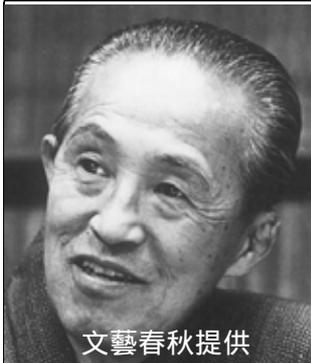
反面、『夫婦善哉』は映画化により好評を博し、『大阪の女』『お父さんはお人好し』シリーズの作者長沖一は、ラジオ放送作家として、大阪の笑いを全国に発信しました。そして、この路線は花登筐の『どてらい男』『銭の花』などによって、なにわの涙と笑いの人情劇を全国のお茶の間に広げました。

また、大阪が舞台になった作品には、意外な文豪、作家の手による作品も多くあります。川端康成『十六歳の日記』『反橋』、梶井基次郎『のんきな患者』、小松左京『日本アパッチ族』、小田実『大阪シンフォニー』、開高健『青い月曜日』、野間宏『青年の環』、林芙美子『めし』などはご存じない方も多いでしょう。

このように大阪は多くの名作の舞台となってきましたが、さらに大阪の風土はおおらかにのびのびと、さまざまな才能を育てました。「文学」の枠ではくくりきれない優れた才能に恵まれた、実にユニークな人材がその土壌ではぐくまれました。大阪を舞台とした作品によって、大阪の文化を全国的に知らしめた作家もいます。以下オムニバスの紹介します。

井上靖

〔第22回芥川賞 1949年下半期 受賞〕



文藝春秋提供

(1907～1991) 北海道生まれ。京都大学文学部哲学科卒業。詩作のため上京して、萩原朔太郎らと面識を得ました。大阪毎日新聞社に入社。学芸部では、部下の山崎豊子を指導しました。茨木市に住みます。野間宏らと交流がありました。1950年に『闘牛』で芥川賞を受賞。1951年に退社して執筆に専念、多くの名作を生み出しました。『天平の躰』での芸術選奨文部大臣賞、『氷壁』などの作品により芸術院賞、『おろしや国酔夢譚』での新潮社第1回日本文学大賞、『孔子』での野間文芸賞など、受賞作多数。ほか代表作は『楼蘭』『敦煌』『蒼き狼』など。1976年に文化勲章を受章しています。

小松左京



小松左京氏提供

(1931～) 大阪市生まれ。京都大学文学部イタリア文学科卒業。経済誌「アトム」記者、漫才台本作家など歴任。1973年の「日本沈没」は、テレビ・映画・劇画化され、400万部突破、センセーションを巻き起こしました。「大阪万博」EXPO'70テーマ館サブプロデューサー、EXPO'90総合プロデューサー等、「大阪花博」（「国際と緑の博覧会」）ではシンポジウム総合プロデューサー、また「大阪咲かそ」シンポジウムプロデューサーを務めました。1990年大阪文化賞受賞。大阪が書かれた作品は、『日本アパッチ族』、『カマガサキニ〇ー三年』、『こちらニッポン…』、『関西過去・未来考 大阪タイムマシン紀行』、『大阪歴史を未来へ』『わたしの大阪』、大阪冬の陣をSFにした『大阪夢の陣』など多数。

【URL】 <http://www.nacos.com/komatsu/>

今東光

〔第36回直木賞 1956年下半年 受賞〕



(1898～1977)神奈川県生まれ。関西学院中学部、兵庫県立豊岡中学校中退。9歳より大阪で育ちました。上京し、川端康成らの第6次「新思潮」の発刊に同人として参加、作家として活躍しますが菊池寛と激しく対立し、一度文壇を去っています。1930年に東京で出家、比叡山にこもり、1951年八尾市中野の天台院の住職となりました。作家活動を再開し、1957年に『お吟さま』で直木賞を受賞します。『悪名』『鬪鷄』『河内風土記』など、八尾周辺を題材にした「河内もの」をてがけ、『悪名』は1961年に勝新太郎・田宮二郎出演の映画となりシリーズ化されるほど大ヒットします。その後大僧正となり中尊寺貫主として、瀬戸内晴美(寂聴)を得度しました。

谷崎潤一郎



(1886～1965)東京都生まれ。東京帝国大学国文科中退。関東大震災を機に関西へ非難、そのまま関西に魅せられて二十余年定住し、関西を舞台にした作品を生み出しました。『卍』『夢喰ふ蟲』『春琴抄』『細雪』等に、天王寺、今橋、浜寺、豊中、道頓堀、道修町、船場、上本町、北浜が出てきます。ほか「阪神見聞録」「私の見た大阪及び大阪人」などのエッセイもあり、「江戸っ子」の目で「大阪人」を捉える様子が記されています。道修町、船場、島之内の裕福で伝統的な大阪の商家の生活をこまやかに観察し、巧みな大阪弁を取り入れて作品化し、大阪を紹介しました。

俵万智



(1962～)門真市生まれ。早稲田大学文学部日本文学科卒業。在学中より佐々木幸綱に師事、短歌を始めました。1987年、高校教員をしながら『サラダ記念日』を発表し、260万部を越えるベストセラーになりました。短歌の書物がこれだけ売れたのは前代未聞のことでした。1988年、「サラダ記念日」で第32回現代歌人協会賞、2004年『愛する源氏物語』で第14回紫式部文学賞受賞。格式やルールに縛られていた短歌の常識を根底から覆し、若い女性読者層を獲得、大幅に「短歌年齢」を引き下げました。『チョコレート語訳みだれ髪』は与謝野晶子『みだれ髪』を現代語訳したものです。

【URL】 <http://www.gtpweb.net/twr/>

筒井康隆



(1934～)大阪市生まれ。同志社大学文学部文化学科卒業。1960年SF同人誌「NULL」を主宰、発表した「お助け」が江戸川乱歩に認められ、作家活動を始めました。主な作品は、「夢の木坂分岐点」(谷崎潤一郎賞受賞)、「ヨッパ谷への降下」(川端康成文学賞受賞)、「文学部唯野教授」、「パプリカ」、91年から92年にかけて、パソコン通信を使った双方向の読者参加型メタフィクションとして話題になった朝日新聞連載の「朝のガスパール」(日本SF大賞受賞)、「ベトナム観光公社」「アフリカの爆弾」「大いなる助走」「虚人たち」(泉鏡花文学賞受賞)「虚航船団」などがあります。02年秋紫綬褒章受賞。戯曲や歌舞伎の台本も書き、俳優としても活躍中です。

【URL】 <http://www.jali.or.jp/tti/>

中谷彰宏

高木美佳氏撮影



(1959～)大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒業 広告代理店でCMプランナーをつとめたのち独立。大阪府立三国丘高校卒業。著書は、就職する大学生のバイブル『面接の達人』(「メンタツ」)ほか、『あなたに起こることはすべて正しい』『あなたのお客さんになりたい』『大人のスピード勉強法』『恋愛小説』など、700冊を越す。執筆のかたわら、俳優として、テレビ・映画にも出演しています。

【URL】 <http://www.an-web.com/>

難波利三

〔第91回直木賞 1984年上半期 受賞〕



難波利三氏提供

(1936～)島根県生まれ。関西外国語短期大学英米語学科中退。『てんのじ村』で大阪の芸人の生き様と愛惜を描き、第91回直木賞受賞。新聞社勤務中、病に倒れ療養中に執筆を始めました。「地虫」で第40回オール読物新人賞(1972年)受賞。第33回大阪市「市民表彰」文化功労部門受賞。「スポーツニッポン新聞関西版」連載の『小説吉本興業』は昭和初期、松竹などと競合しながら現在の繁栄を見るまでの吉本興業の歩みを、大阪人ならではの視点で捉え描きました。『大阪希望館』『通天閣夜情』『大阪笑人物語』など、大阪が描かれたもの多数。現在、大阪市立クラフトパーク初代館長を務めます。

宮本輝

〔第78回芥川賞 1977年下半期 受賞〕



宮本輝ミュージアム提供

(1947～)兵庫県生まれ。70年に追手門学院大学文学部卒業。77年、「泥の河」で第13回太宰治賞、翌年には「螢川」で第78回芥川賞を受賞。本格的に作家活動に入ります。87年には、「優駿」で吉川英治文学賞に輝きました。「泥の河」(モスクワ国際映画祭で銀賞)、「幻の光」(ベネチア国際映画祭で金のオゼツラ賞)など国内外で数々の作品が映画、ドラマ化されました。現在、芥川賞の選考委員を務めます。

【URL】 <http://www.terumiyamoto.com/>

★「宮本輝ミュージアム」大阪府茨木市西安威 2-1-15 追手門大学図書館内

【URL】 <http://www.oulib.otemon.ac.jp/lib/teru/teru.html>

三好達治



文藝春秋提供

(1900～1964)大阪市生まれ。東京帝国大学文学部仏文科卒業。大学在学中に梶井基次郎、中谷孝雄らが創刊した同人誌「青空」に参加し、のち後萩原朔太郎を知り、「詩と詩論」の創刊に加わり、詩、翻訳等を発表し、翌年にはボードレールの散文詩集「巴里の憂鬱」全訳を出版。1930年には処女詩集「測量船」を刊行し、詩人として確固たる地位を得ました。彼の業績をたたえて出身地の大阪市が創設した「三好達治賞」の第1回授与式が2006年4月市長公館で行われます。

5. 文学の普及・所蔵、そして街づくりへ —文学の庫—

(1) 文学館

大阪府内の文学館は、独自の思いと努力で文学の普及に貢献しています。作家の出身地の自治体や出身校が彼らを誇りに思い設立されたものもあります。それぞれに、単なる文学需要だけにとどまるのではなく、文学の偉業を通じて人が集い心をひとつにする場を提供し、やがてはまちづくりへと広げていこうという考えで運営され、文学を通じて広く社会貢献をしています。

<p>大阪府立国際児童文学館</p>	<p>吹田市千里万博公園 10-6 【URL】 http://www.iiclo.or.jp</p>
 <p>国際児童文学館提供</p>	<p>大阪府立国際児童文学館は、わが国最初の国際的な児童文学資料・研究・情報センターです。国際的規模で日本と外国の児童文学等に関する資料約 71 万点が集められています。 千里万博公園にあり、正面には岡本太郎の太陽の塔が望めます。</p>
<p>与謝野晶子文芸館</p>	<p>堺市堺区田出井町 1 番 2-200 号 【URL】 http://www.sakai-bunshin.com/bunka/b02.html</p>
 <p>堺市提供</p>	<p>与謝野晶子文芸館では、堺出身の‘情熱の歌人’与謝野晶子の作品や書簡、ゆかりの品々を展示しているほか、「アルフォンス・ミュシャ館」では、アール・ヌーヴォーを代表する画家、アルフォンス・ミュシャの生涯と活動を紹介。その創作活動の歩みをたどることができます。ミュシャの『明星』の表紙や挿絵に使われています。文筆活動にとどまらず、女性の権利に焦点をあてた評論や教育活動にも力を注いだ彼女の生涯が紹介されています。</p>
<p>川端康成文学館</p>	<p>茨木市上中条 2-11-25 【URL】 http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kawabata/index.html</p>
 <p>川端康成記念館提供</p>	<p>茨木市は「川端康成のゆかりのふるさと」として、多くの市民が川端康成やその文学に親しむ拠点となるよう、1985 年 川端康成文学館を開館しました。館内では、川端康成の書簡、著書、原稿や墨書のほか、祖父母と暮らした幼少期の屋敷の模型などを展示しています。日本で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成を讃え、幼児期から旧制中学校卒業までをすごした茨木市が第一号の『茨木市名誉市民』として認定し、その文学をひろく市民に広めるため開かれました。</p>
<p>富士正晴記念館</p>	<p>茨木市畑田町 1-51 茨木市立図書館内 【URL】 http://www2.opas.gr.jp/ibaraki/info_files/ibkoho/24/g2463.htm</p>
 <p>富士正晴記念館提供</p>	<p>富士正晴記念館は、茨木市立図書館が遺族から寄託された約 8 万点にのぼる生原稿・書簡・書画などをもとに開設されました。一人の文学者が残した資料として我が国最大級のものです。 館内に彼の書斎を復元。所蔵市長を年三回入れ替え展示をしています。また、目録集により、全資料の検索が可能です。(ただし、一部非公開資料もあります。)</p>

<p>宮本輝 ミュージアム</p>	<p>茨木市西安威 2-1-15 追手門学院大学図書館内 【URL】 http://www.oullib.otemon.ac.jp/lib/teru/teru.html</p>
 <p>宮本輝ミュージアム提供</p>	<p>宮本輝ミュージアムは、追手門学院が創立 120 周年記念事業の一環として、大学附属図書館内に卒業生で、芥川龍之介賞受賞作家 宮本輝氏の著作や原稿等を集めて、2005 年 5 月に開設しました。ミュージアムでは、宮本輝氏が作品について語ったオリジナルビデオなども公開しています。彼の著作等を通して学生及び市民に感動と共感の場を提供することを目的にしています。</p>
<p>直木三十五記念館</p>	<p>大阪府中央区谷町 6 丁目 5-26 【URL】 http://www.eonet.ne.jp/~karaahoriclub/naoki/</p>
 <p>直木三十五記念館提供</p>	<p>直木三十五記念館は、直木三十五が生まれ育ったまちである旧の内安堂寺町、東賑町、西賑町を含む桃園地区(現在の谷町 6 丁目付近)に地元地域の文化のシンボルになるべく、市民の手によって平成 17 年にグランドオープンしました。単に直木三十五の功績をたたえるに留まらず、地元の人々がそこに直木三十五という才能あふれた作家がいたことを再認識することはもとより、直木が目指した文化の創造と情報の発信基地として、地元の人々の熱い思いに支えられた市民参加型の新しいタイプのミュージアムです。</p>
<p>司馬遼太郎記念館</p>	<p>東大阪市下小阪 3-11-118 【URL】 http://www.shibazaidan.or.jp/</p>
 <p>© 司馬遼太郎記念財団</p>	<p>司馬遼太郎記念館は、彼の自宅と庭伝いに一体化された設計で、来館者は散策道を歩きながら生前のままに保存された司馬遼太郎の書齋を窓越しに見ることができます。 司馬遼太郎記念館は建築家安藤忠雄氏設計の建物で、高さ 11m の壁面に約 3,400 の書棚が張り付く大書架があり、約 2 万冊の書籍が収まっています。</p>
<p>池田文庫 (財団法人阪急学園 池田文庫)</p>	<p>池田市栄本町 12-1 【URL】 http://www.ikedabunko.or.jp/</p>
 <p>池田文庫提供</p>	<p>池田文庫は、阪急東宝グループの創設者であり、宝塚歌劇の父・小林一三(雅号・逸翁)が設立した図書館が始まりです。1911 年に宝塚新温泉(後の宝塚ファミリーランド)を開業し、その一室に新聞や雑誌を置きました。宝塚歌劇上演のための資料を収集し、1932 年設立の宝塚文芸図書館時代には、演劇専門の図書館として、映画・演劇書はもちろん、役者絵・絵看板・番付などの歌舞伎関係資料を精力的に収集しました。上方役者絵の所蔵は世界一であり、タカラヅカの宝庫としても類を見ません。</p>
<p>織田作之助記念文庫</p>	<p>大阪府天王寺区餌差町 10 番 47 号 大阪府立高津高等学校図書室内 【URL】 http://www.osaka-c.ed.jp/kozu/</p>
 <p>織田作之助記念文庫提供</p>	<p>織田作之助記念文庫は、織田作が通っていた高津高等学校の図書室の一角に設けられています。文庫の蔵書数は二、三十冊程度しかありませんが、中には、初版本などの幾つかの貴重な資料もあります。学校図書館ですので常時公開はしておりませんが、見学ご希望の場合は、事前に高津高等学校図書室までご連絡ください。 連絡先 高津高等学校(代表 TEL 06-6761-0336)</p>

(2) 図書館

大阪府立中之島図書館には文学に関する文献、稀少本など貴重な資料が数多く保存されています。

大阪府立中之島図書館(大阪市北区中之島1丁目2番10号)

【URL】 <http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/index.html>



大阪中之島図書館提供

大阪府立中之島図書館は大阪の住友家第15代住友吉左衛門友純が巨費を投じて建築し、大阪府に寄付したもので、1904年(明治37)に開館した大阪で最初の公立図書館です。1922年(大正11)には左右両翼棟も第15代住友吉左衛門の寄付で建築され、ほぼ現在の姿になりました。イタリアの建築家パツラーディオの意匠を取り込んだネオ・クラシック様式の美しい建物は、隣接する中央公会堂と共に大阪のシンボルとされています。1974年(昭和49)には本館をはじめ左右両翼棟と書庫の一部が国の重要文化財の指定を受けました。1996年(平成8)

には東大阪市荒本に大阪府立中央図書館が開館し、中之島図書館は大阪資料・古典籍を中心にした図書館となり、2004年(平成16)にはビジネス支援室を新たに立ち上げました。

中之島図書館には、開館以来蓄積されてきた和漢の古典籍から現代の資料まで収蔵されていますが、ここでは文芸物を中心に内容を簡単に紹介します。古典籍のうち貴重書に指定したものには「日本書紀神代卷」(古活字版)「万葉集」(古活字版)「正平版論語」などの版本や貴重な写本類も多くあります。近世の町人学者山片幡桃の「夢の代」、富永仲基の「翁の文」、井原西鶴の浮世草子「好色一代男」「好色一代女」「武道伝来記」「日本永代蔵」「世間胸算用」や近松門左衛門の浄瑠璃本「国性爺合戦」「天満神明氷の朔日」、歌舞伎脚本「けいせい仏原」など。近世の大阪俳壇を代表する西山宗因、小西来山。また大阪の学問所懐徳堂の中井竹山・履軒や梅花社の篠崎小竹、泊園書院を主宰した藤沢東暎、南岳の著書があります。上田秋成は大阪の人。「雨月物語」をはじめ自筆稿本「神代かたり」などがあります。漢詩漢文学作品では近世の混沌社中の葛子琴の漢詩、木村蒹葭堂も連中の一人でしたが、彼らの作品集もあります。

大阪近代文芸のはじまりは明治20年代と言われますが、明治12年に発刊された関西最初の文芸雑誌「浪華叢談 蒹葭具佐」をはじめ、明治20年代に発刊された「なにはがた」「大阪文芸」「浪花文学」などの雑誌があります。明治期に活躍した西村天囚、本吉欠伸、木崎好尚、須藤南翠、宇田川文海、渡辺霞亭などの小説、与謝野晶子、河井醉茗、薄田泣菫の詩集、大正期には直木三十五、岡田播陽などの小説もあり、昭和期に活躍した作家藤沢桓夫、織田作之助、歌人川田順の旧蔵書は寄贈を受けて個人文庫として公開しています。昭和から平成の作家の代表として司馬遼太郎、田辺聖子の作品群。田辺聖子の小説「道頓堀の雨に別れて以来なり」の主人公、川柳作家岸本水府の自筆原稿、俳人として戦中から戦後にかけて活躍した入江来布の原稿や来簡集もあります。近代以降大阪で活躍した作家の文学作品の初版本も収集しています。長谷川幸延、川端康成、今東光、水上瀧太郎などを挙げるができます。

近世から現代まで大阪にゆかりの文芸作家の作品を中之島図書館で辿ってみることができます。

6. 大阪文学のPR戦略

(1) 市民向け講演会の開催

大阪は多くの文豪を輩出し、その作品は日本だけではなく、海外でも翻訳されているものも少なくない。しかし、昨今の日本では活字離れが進み、名作と言われる作品までもが人々から次第に忘れられつつある。

大阪には大学、文学館、図書館など、文学に親しめる施設が多数存在し、また文学に関する研究者も多い。そこで、施設、人材など、大阪の有する資源を活用し、「大阪の文学」をテーマに、市民向けの講演会を開催し、人々に大阪の文学への関心を高めていくことが望まれる。

(2) 学校教育における大阪文学講座の開催

大阪府内の学校教育の場で、大阪が輩出した巨匠や名作、大阪が舞台になった名作や名場面を紹介する大阪文学講座を開設し、大阪文学への関心を高めることを提案する。

折りしも、大阪府内の国公立大学で組織される「大学コンソーシアム大阪」では、2006年4月から大阪の歴史や文化を学ぶ「大阪学」を296科目開設し、府内30校で単位互換制度を始める。「大阪学」には大阪の文学に関する授業も含まれており、大阪府内外の学生に大阪の文学に触れる機会を提供することが期待される。

(3) 大阪文学マップの作成

文豪の史跡、名作の舞台、文学館など、大阪には文学に関する資源がたくさんある。にもかかわらず、人々にはあまり知られていない。そこで、こうした資源を地図にまとめて、「大阪文学マップ」を作成すれば、観光資源として、大阪だけでなく、日本全国、海外の人々にも広くアピールできるのではないか。

<参考> 大阪文学年表（江戸時代以降）

時代	年・元号	事項	備考
江戸			1584 豊臣秀吉大坂城に移る 1614 大坂冬の陣 1615 大坂夏の陣 豊臣家滅亡
	1648	西山宗因、大阪天満宮連歌所宗匠となる。	
	1673	井原西鶴『生玉万句』『歌仙大坂俳諧師』刊。 宗因『宗因千句』刊。	
	1675	宗因『大坂独吟集』刊。	1677 井原西鶴、生玉本覚寺で1夜1日1600句大矢数俳諧
	1679	三田浄久『河内鑑名所記』刊。	
	1681	西鶴『大矢数俳諧』刊。	
	1682	西鶴『好色一代男』刊。	
	1684	西鶴、一昼夜に二万三千五百句独吟。	
	1685	西鶴『西鶴諸国はなし』刊。	1685 道頓堀に竹本座旗揚げ
	1686	西鶴『好色五人女』『好色一代女』 『本朝二十不孝』刊。	
	1687	西鶴『男色大鑑』『懐硯』『武道伝来記』刊。	
	1688	西鶴『日本永代蔵』刊。	
	1692	西鶴『世間胸算用』刊。 前句付集『咲やこの花』刊。	
	1693	西鶴没す。 前句付集『浪花土産』刊。	
	1694	松尾芭蕉、大坂で客死。 亡くなった場所は「花屋仁右衛門貸座敷」（現御堂筋東側緑地帯内）とされる。	
	1696	西鶴『万の文反古』刊。	
	1700	西沢一風『御前義経記』刊。	
	1702	都の錦『元禄太平記』刊。	
	1703	近松門左衛門『曾根崎心中』（浄瑠璃）初演。	
	1705	近松、京都から大坂へ移住し、竹本座の座付き作者となる。	
	1711	近松『冥途の飛脚』（浄瑠璃）初演。	
	1713	北条団水『日本新永代蔵』刊。	
	1715	紀海音『八百屋お七』（浄瑠璃）、この頃初演。	
	1716	与謝蕪村、摂津国東成郡毛馬村（？）に生まれる。	1716 享保の改革始まる。
	1720	近松『心中天の網島』（浄瑠璃）初演。	

時代	年・元号	事項	備考
江戸	1724	私塾「懷徳堂」の設立。	1723 幕府、心中物の出版・上演を禁止する。 1724 大坂大火。 1727 堂島米相場会所設立 1732 西国大飢饉。
	1734	松木淡々『紀行誹談二十歌仙』刊。	
	1745	並木千柳・三好松洛・竹田小出雲『夏祭浪花鑑』(浄瑠璃)初演。	
	1746	千柳・松洛・出雲『菅原伝授手習鑑』(浄瑠璃)初演。 富永仲基「翁の文」刊。	
	1747	千柳・松洛・出雲『義経千本桜』(浄瑠璃)初演。	
	1748	千柳・松洛・出雲『仮名手本忠臣蔵』(浄瑠璃)初演。	
	1749	都賀庭鐘『古今奇談英草子』刊。	
	1766	上田秋成『諸道聞耳世間猿』刊。	
	1767	秋成『世間妾形気』刊。	
	1776	秋成『雨月物語』刊。	
	1777	与謝蕪村「春風馬堤曲」成。	
	1779	木村兼葎堂『兼葎堂日記』この頃から書き始められる。	
	1805	初世植村文楽軒、人形浄瑠璃興行を開始。	
	1809	秋成『春雨物語』この頃成。	
	1820	山片蟠桃『夢の代』成立。	
1833	尾崎雅嘉『百人一首一夕話』刊。		
1838	緒方洪庵「適塾」を開く。	1837 大塩平八郎の乱 1868 鳥羽・伏見の戦い 大坂城炎上大阪府設置	
明治	1872	三世植村文楽軒、松島(大阪市西区)に「文楽座」を作る。	1871 廃藩置県 1874 大阪府庁舎江之子島に落成
	1878	与謝野晶子、堺市に生まれる。	
	1891	直木三十五、大阪市南区に生まれる。	1889 大日本帝国憲法発布 大阪、堺に市制施行
	1899	大阪市北区に川端康成生まれる。	
	1901	与謝野晶子『みだれ髪』刊。	1904 大阪図書館(現大阪府立中ノ島図書館)開館
大正	1913	岸本水府ら、川柳雑誌『番傘』を創刊。	1918 大阪中央公会堂竣工
	1923	日本初の洋式劇場「大阪松竹座」開場。	1923 関東大震災

時代	年・元号	事項	備考
大正	1924	麻生路郎『川柳雑誌』を創刊。	
	1925	川端康成『十六歳の日記』を発表。	
昭和	1928	谷崎潤一郎『朧』発表。	1929 四ツ橋に文楽座新築落成
	1930	直木三十五『南国太平記』を「大阪毎日新聞」に連載。	1931 大阪城公園・天守閣竣工式 1932 大阪歌舞伎座開場
	1933	武田麟太郎『釜ヶ崎』発表。 谷崎潤一郎『春琴抄』発表。	1933 地下鉄梅田～心斎橋開通 1935 地下鉄難波まで延伸
	1936	井上靖、大阪毎日新聞社に入社。	
	1940	織田作之助『夫婦善哉』発表。 河内仙助、『軍事郵便』で第11回直木賞を受賞。 小野十三郎、詩集『大阪』を発表。	
	1941	櫻田常久、『平賀源内』で第12回芥川賞を受賞。	
	1943	長谷川幸延『浪花隊顛末』刊。 谷崎潤一郎『中央公論』に『細雪』の連載を開始。	
	1944	岡田誠三、『ニューギニア山岳戦』で第19回直木賞を受賞。	1945 大阪大空襲・終戦
	1948	川端康成『反橋』を発表。	
	1949	由起しげ子、『本の話』で第21回芥川賞を受賞。	
	1950	井上靖、『闘牛』で第22回芥川賞受賞。	
	1953	五味康祐、『喪神』で第28回芥川賞を受賞。	
	1954	大阪文学学校開校。	
	1955	庄野潤三、『プールサイド小景』で第32回芥川賞を受賞。	1955 人形浄瑠璃文楽が重要文化財に指定される
	1956	長沖一『お父さんはお人好し』刊。	
	1957	今東光、『お吟さま』で第36回直木賞を受賞。	
	1958	開高建、『裸の王様』で第38回芥川賞を受賞。 山崎豊子、『花のれん』で第39回直木賞を受賞。	
	1959	開高建、『日本三文オペラ』を発表。	
	1960	司馬遼太郎、『梟の城』で第42回直木賞を受賞。	
	1961	黒岩重吾、『背徳のメス』で第44回直木賞を受賞。	1961 大阪環状線開通 1962 千里ニュータウンまちびらき
1963	河野多恵子、『蟹』で第49回芥川賞受賞。		
1964	田辺聖子、『感傷旅行センチメンタルジャーニー』で第50回芥川賞受賞。		

時代	年・元号	事項	備考	
昭和	1965	司馬遼太郎、『竜馬がゆく』『国盗り物語』で菊池寛賞受賞。		
	1966	新橋遊吉、『八百長』で第54回直木賞受賞。		
	1968	富士正晴、『桂春団治』で毎日出版文化賞受賞。		
	1969	佐藤愛子、『戦いすんで日が暮れて』で第61回直木賞受賞	1970 万国博覧会開幕 「人類の進歩と調和」テーマ (アジア初の国際博) 泉北ニュータウン完成	
	1972	司馬遼太郎、『世に棲む日々』で吉川英治文学賞受賞。		
	1973	小松左京『日本沈没』刊。雑誌『大阪春秋』創刊。		
	1974	藤本義一、『鬼の詩』で第71回直木賞受賞。		
	1975	阪田寛夫、『土の器』で第72回芥川賞受賞。		
	1976	司馬遼太郎、日本芸術院恩賜賞受賞。 三好達治記念館開設。高槻市「本澄寺」内。		
	1977	三田誠広、『いちご同盟』で第77回芥川賞受賞。		
	1978	宮本輝、『蜚川』で第78回芥川賞受賞。 高橋三千綱、『九月の空』で第79回芥川賞受賞。		
	1979	有明夏夫、『大浪花諸人往来 耳なし源蔵召捕記事』で第80回直木賞を受賞。		
	1980	大阪府立国際児童文学館(http://www.iiclo.or.jp/)設立。		
	1982	「大阪女性文芸賞」設置。		
	1984	難波利三、『てんのじ村』で第91回直木賞受賞。 「織田作之助賞」設置。		1984 国立文楽劇場 開場
	1985	川端康成文学記念館開設。		1985 阪神タイガース、初の日本一
1986	米谷ふみ子、『過越しの祭』で第94回芥川賞受賞。			
1987	俵万智『サラダ記念日』刊。 宮本輝、『優駿』で第21回吉川英治賞を受賞。			
平成	1989	堺市「自由都市文学賞」を設置。		1990 国際花と緑の博覧会
	1991	山崎豊子、菊池寛賞を受賞。	1994 関西国際空港開港	
	1993	高村薫、『マークスの山』で第114回直木賞受賞。	1995 阪神淡路大震災APEC大阪会議 開催	
	1995	藤原伊織、『テロリストのパラソル』で第41回江戸川乱歩賞、 翌年第114回直木賞を受賞。	1997 大阪城平成の大改修	
	2000	玄月、『蔭の棲みか』で第122芥川賞を受賞。 町田康、『きれぎれ』で第123回芥川賞を受賞。	2001 第14回世界観光機関(WTO)総会 開催	
	2001	東大阪市に「司馬遼太郎記念館」開設。		

時代	年・元号	事項	備考
平成			<p>2002 第8回国際エネルギーフォーラム開催</p> <p>2003 第3回世界水フォーラム開催・大阪府中央公会堂重要文化財に指定</p> <p>2004 国際文化公園都市「彩都」の一部まちびらき</p>
	2005	<p>朱川湊人、『花まんま』で第133回直木賞受賞。</p> <p>追手門学院大学附属図書館に「宮本輝ミュージアム」開設。</p> <p>大阪府中央区に「直木三十五記念館」開設。</p> <p>『大阪近代文学事典』(和泉事典シリーズ)刊。</p> <p>「三好達治賞」設立。</p>	
	2006	東野圭吾『容疑者Xの献身』で第134回直木賞受賞。	

※ [大阪歴史博物館常設展示案内年表参考「大阪歴史年表」](#)
 (『大阪府公式まいどブック』大阪府 知事公室広報室平成16年3月)より

文学パネル構成メンバー（※敬称略）

パネル座長

森田雅也（関西学院大学文学部教授）

パネル委員

吉村 稔（園田女子大学未来デザイン学部教授）

善塔正史（国立明石工業高等専門学校教授）

吉相慶子（高野山大学文学部非常勤講師）

事務局

社団法人 心学明誠舎

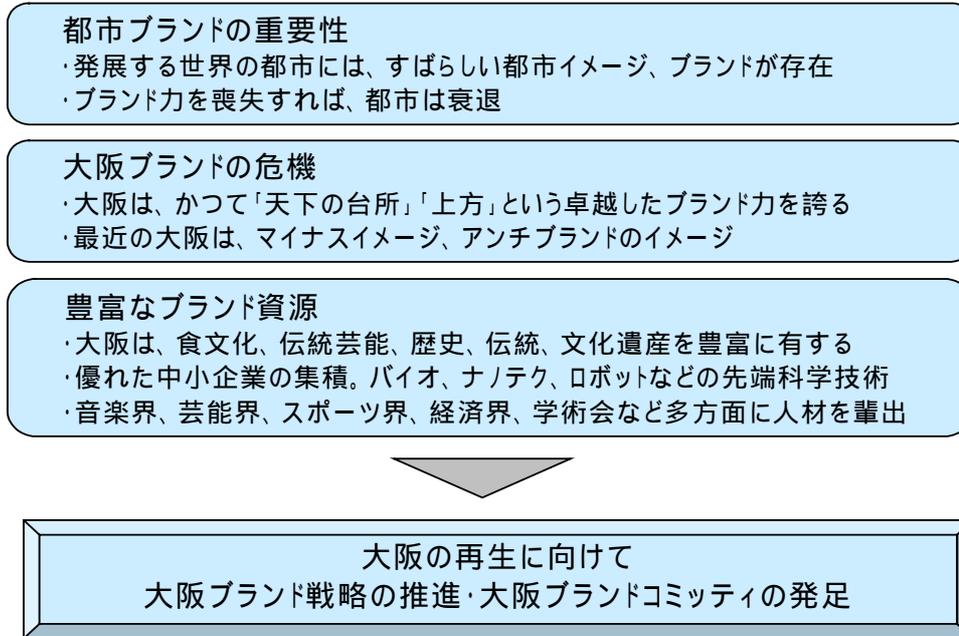
（執筆者）

藤原智子（関西学院大学大学院研究員）

寺敬子（関西学院大学大学院生）

【参考】 大阪ブランド戦略について

■ 大阪ブランドコミッティの設立趣旨 ~ 大阪に吹く新しい風 Brand-New Osaka ~



■ 大阪ブランド戦略の概要

「大阪ブランド戦略」の意味

大阪という言葉から連想される良いイメージ(ブランド=都市魅力)を回復、向上、確立し、情報発信する活動。
(大阪が自信と誇りを取り戻し、新たな発展に向かう気概を内外にアピールする運動)

目的

大阪ブランド戦略の目的は、「大阪の再生」。
新たな大阪のイメージ < Brand-New Osaka > を創出、定着させ、人、もの、資金、情報、企業を呼び込むことで、「大阪の再生」を目指す。

活動内容

大阪を知る

大阪の魅力をアピールできる歴史・伝統・文化遺産、優れた技術・企業・人材などを「ブランド資源」(大阪の強み)として発掘又は再評価する活動。

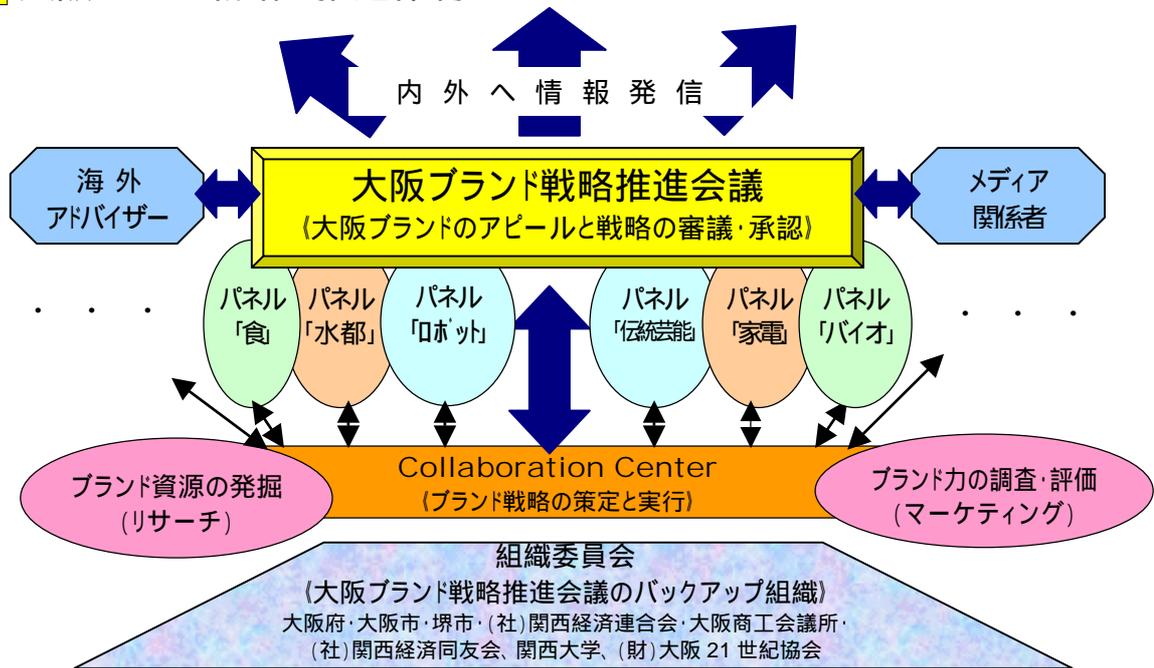
大阪を磨く

「ブランド資源」について、価値の明確化、新たな魅力の付加等により、その魅力を増大させる活動。

大阪を語る

「大阪ブランド」を統一的消息として、国内外に向けて戦略的に発信する活動。

大阪ブランド戦略の推進体制



大阪ブランドコミッティにご協力いただいている方々

大阪ブランドコミッティ

【大阪ブランド戦略推進会議】

議長 安藤忠雄氏(建築家・東京大学名誉教授)
コシヒロコ氏(デザイナー)
坂田藤十郎氏(歌舞伎俳優)

顧問 梅棹忠夫氏(国立民族学博物館顧問)
大久保昌一氏(大阪大学名誉教授)
岸本忠三氏(大阪府特別顧問)
宮原秀夫氏(大阪大学総長)

委員 専門家、有識者、文化人など約100名

【コラボレーションセンター】

チーフ 堀井良殷氏((財)大阪21世紀協会理事長)

【組織委員会】

委員長: 熊谷信昭氏((財)大阪21世紀協会会長)

委員: 太田房江氏(大阪府知事)
關 淳一氏(大阪市長)
木原敬介氏(堺市長)
河田悌一氏(関西大学学長)
秋山喜久氏((社)関西経済連合会会長)
野村明雄氏(大阪商工会議所会頭)
寺田千代乃氏((社)関西経済同友会特別幹事)